

9月16日に「名鉄沿線ハイキング」が実施され、約2700人の参加者が笠松町を訪れました。今回は、名鉄笠松駅をスタートし、笠松町内を歩いて新木曾川橋を渡り、名鉄新木曾川駅をゴールとする約6.5kmのコースです。

笠松町内では、笠松中学校と岐阜工業高等学校の生徒、町民の有志がおもてなしの活動を行いました。

「フラットおかしょく」前では、岐阜工業高等学校の生徒が参加者に励ましの声をかけながら、コース地図や笠松の名所案内を配布しました。

また、コース途中の鮎鮎街道・笠松問屋前や善光寺内では、まちめぐりマイスター（笠松力検定上級合格者）が史跡などを解説したほか、杉山邸では美濃縮に関する作業の実演、歴史未来館前では笠松グッズの販売が行われました。

さらに、コースを間違えやすい地点には笠松中学校の生徒が自ら作成した案内板を掲げて道案内をしました。

参加者の多くが、おもてなしの心を受け止め、笠松のよさに触れ、心地よくゴールをめざすことができました。「笠松の人々の温かさを感じることができ、清々しい気持ちで参加できました。」という声が聞かれました。

これからも、笠松を訪れる人、笠松に住む人の心が安らぐまちにしたいですね。



たくさんの方が笠松町を訪れました



ボランティアの皆さんの活躍が光りました

かさまつの民話「昔むかし」
こま化け橋 ④

男たちは、もつこで土を運び、がんどで木を切った。みんながもくもくと働いた。やがて日が暮れたが闇の中を松明の光が走りまわった。夜中になっても、誰ひとり休むとはいわなんだ。

「わっちららの名誉のために、わたしんらの子どものために」村人はむちやくちや働いた。そして、つかれはてたれからともなくトロリトロリと深いねむりに落ちていったんじゃ。

ヒュル、ヒュルすきとおるような笛の音がした。前の橋より大きく、きらびやかな橋を今將軍が渡っていくところじゃった。男どもも女もぐっすりねむりかけておったが、笛の音で目覚めてびっくりした。なんども、なん

ども目をこすって、夢じゃないかと思った。そんで、ようよう見たと。

なんと、なんと、橋板は女どもが引いてきた木板じゃし、板の上の土は男どもの運んだドロだと。

「あれ、橋げたがわしらの馬だ。」

「おや、先頭は、黒だ。」
(つづく)



〈注〉このぎりの二種で、主に丸太などを切断するために使われる。

かさまつの民話「昔むかし」は昭和54年に発行されました。笠松中央公民館 松枝公民館 総合会館でご覧いただけます。